

處が多かつたが、良晃君は今や不慮の遷化をとげている。叔父叔母の悲しみも又察するに余りがある。

私は嘗てあの魔の海を四回渡つた事がある。青森を出てから函館へ舩をつける迄四時間餘り、津輕、下北の兩半島に圍まれた船路は美しい。あの様に大惨事が起つた事などは丸で嘘の様である。私はこの船路を想い出し、また北海道のこと共に話題が進む時、あの千數百人の人々の魂の事が一時も忘れ得ない。そして此の人々の先立ちとなつて僧服を纏い經文を口に念じ乍ら船中の衆生を彼方に濟度した良晃君の事どもは私の胸に終生残るに違いない。近く東京灣を眼下に望める横須賀萬藏寺の境内に良晃君とその犠牲者の靈をまつる地藏尊が建立されると云ふ事である。良晃君の靈もつて瞑すべきである。

### 親しき友桑山さんに送る

可睡齋僧堂内

小野寺 秀和  
太田 正巳

あゝ洞爺丸。一瞬にして千有餘の人を一呑にして、儂く海底に沈んだ洞爺丸、其の中に親しき友桑山さんも居られたとは、只々餘りの驚きに漠然として夢うつつのやうに心が去來する。靜かに思ひを回らせば過去一年間の桑山さんは、永遠に忘れる事の出来ない人である。可睡齋安居中は桑山さんと、嬉しい時も悲しい時も共に手を取り合つて暮した事が目に浮ぶ、ある時は、寒中に水を被り行水に三昧した事もあり、又ある時は肝膽相照して共に一献傾けた事も想ひ出の一つとなつてしまつた。桑山さんは道心堅固で大衆欣慕の的であり、實に將來宗門を背負ふ有望な僧侶であつたと私達は信ずる。今は無き桑山さんの、教訓を只管に思ひ出して我々の今後行く

べき羅針盤として、愛宗護法に精進致します。願くは桑山さんよ、安らかに菩提を圓にせられて他界に機化せられん事を。

兄を偲んで

桑山 信晃

九月廿七日夜の事である。突然電報々々と云ふ聲に家中一瞬靜まり、やがてそれを讀み上げる聲に耳を傾けた。青函連絡局長發信「トウヤマルソウナンシタ、トリアエズシラス」。慌て、新聞を引出し、生存者の各名簿欄を繰返し見たが見當らず、家中の者は手分して郵便局や横須賀驛へ行き尋ねたが、北海道は台風の爲電報電話一切不通であつた。その後ラヂオで讀み上げた乗船者名簿の最後の方に桑山良晃とあつたので一瞬頭をガンと打たれた様な氣持ちで、取る物も不取敢、父と共に函館へ向つた。車中では唯無事々と祈るばかりで何を考へる事も出来なかつた。廿九日の早朝函館へ着いた。洞爺丸遭難對策本部へ匪込み生存者名簿を二度三度と見たが兄の名は見附からず、係員に尋ねてもはつきりした答は得られず氣が焦るばかりであつた。慰靈堂へ行つて見ると三百坪もある堂内は、四百余の遺体で一杯になり足の踏み場もない程であつた。中には全く無傷で安らかに眠つてゐる様なものもあるが、最後迄匍き苦しみ両手で虚空を掴んだ儘事切れてゐるものもあり、その殆んどの人達は砂濱に敲附けられ、砂濱を這上つては波に引摺られ又這上つては引摺られるのを繰返し乍ら力盡きて死んでしまつたものらしい。目鼻口等に砂がめりこんで居るのはそれを物語つてゐるのであらう。一番胸を締附けられたのは若い母親とその子供の姿であつた。母親は顔